

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編時代小説 秘聞 柳生石舟斎

¥ 350

昭和46年5月30日 初版発行

昭和47年12月20日 7版発行

著者 八 切 止 夫
東京都中央区日本橋蛸薬町
2-20

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京115347 電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)
表紙の様模・意匠登録 116613 © Tomeo Yagiri 1971

(分)0-2-93(製)02193(出)2271 (0)

長編時代小説・書下ろし

ひ ぶん やぎゅう せき しゅう さい
秘聞 柳生石舟斎

や ぎり とめ お
八切止夫



カッパ・ノベルス

目次

柳生やぎゅうの民

.....5

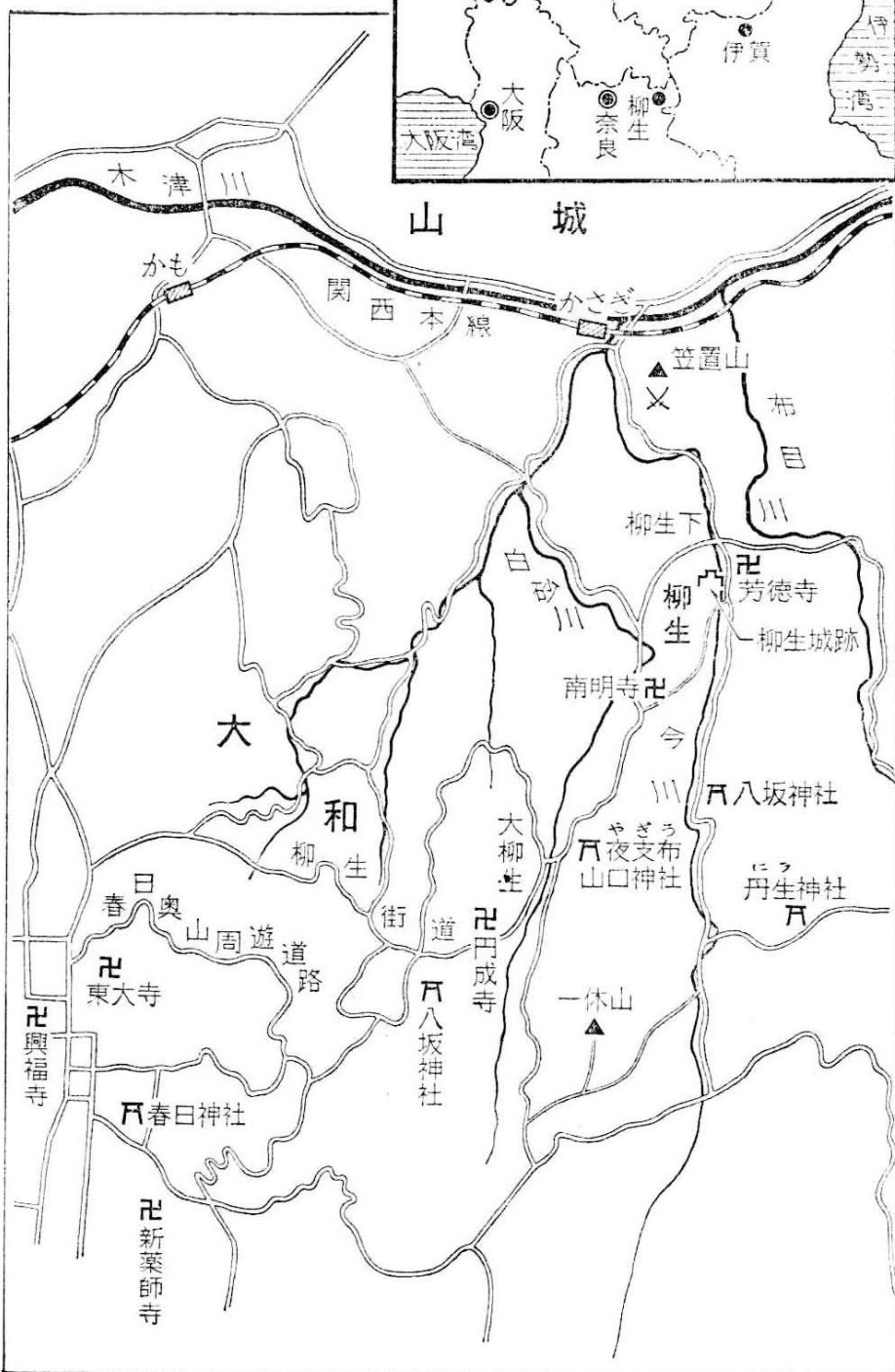
新介しんすけ初手柄

.....87

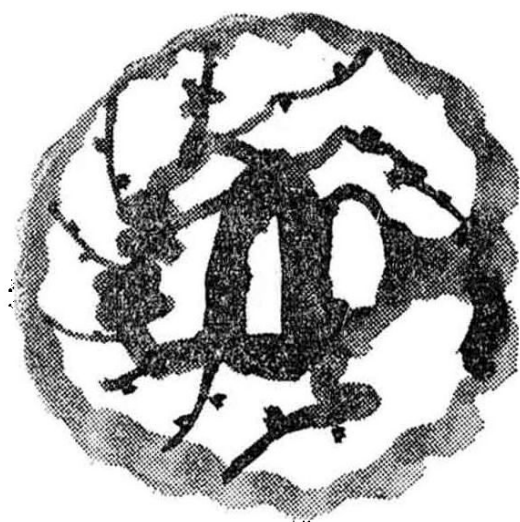
柳生開眼

.....157

柳生周辺図



柳^{やぎ}
生^{ゆう}
の
民



筒井勢の柳生攻め

「やあやあ、柳生のやつばら覚悟を致せ……われこそは大和一国の軍勢を預かる筒井順昭なり、いざ出あえ、出あえ」

金輪冠りの法師頭巾の下から大音声によばわり

つ、大雑刀をふり回し、

「紅葉館の長吏頭新左のし、首を取ってきた者には、これなる柳生の庄を恩賞としてくれてやらず」と味方の者を励ました。

そこで率いて来られた軍勢も勇氣百倍し、

「おのれ人外の奴ばらめ、降魔の利剣をうけてみい」とばかり勢いだつて柳生谷を取り囲んだ。

なにしろ、この天文十三年というのは、足利將軍義晴が管領細川晴元と和議を結んだため、ひとまず洛中は平穩になっていた。だが山陰地方では尼子晴久が伯耆・因幡の国々を切り従えている最

中であつたし、東海地方では、前年に今川義元を三河小豆坂で破つて大勝した織田信秀が、美濃の国を家来の斎藤道三に奪われ、頼つてきた元守護の土岐頼芸のためにというより己れの侵略の野望のため兵を集めていた矢先である。

つまり、どこもかしこも戦雲のたなびいていた時代ゆえ、殺伐の気がみなぎっていた。

さて、このときの合戦の次第は……

奈良興福寺多聞院の英俊和尚が、その日記の、天文十三年（一五四四）七月二十七日の条に、

「筒井（順昭―順慶の父）どの兵を出され、柳生を攻めたもう」とかいている。

もともと、この柳生の庄というのは、楊生とまだよんでいた建武のころに、笠置山へたてこもつた後醍醐帝の許へ、中坊が衆徒を率いて味方した手柄により、中興のときにこの地を賜わつたものであるとされている。

しかし建武の中興が失敗し、足利の世となつた

ので、中坊は逆徒として追われる立場になり、兄永珍がそれに代わった。

しかし柳生の里は、元来が農耕の民の住みついていた所ではないため、田畑はすくない。だから一帯の大檀那である興福寺の簡井へ年貢を納めるということもなく、京七道の辻の者と同様に長いあいだ除地となっていた。

しかし、簡井の方でも、そのままでは柳生の一帯だけがまるで別天地のような形になってしまつて、思わしくないゆえ、せめて課役に人夫なりと差し出すようにと、再三、再四にわたって交渉の使いをよこしてきていた。

そこで、当時、長吏頭として紅葉坂の館にあつた永珍の裔の新左衛門（「柳生家記」では、美作守家蔵としている）は、やむなく信貴城松永久秀の手を通じ三好長慶の庇護を求めた。

それを知った簡井順昭は、

「えい、やぎう者めが……」と五百の兵を催し、

摩利支天山と靈源峠の両方から挟み討ちに柳生を攻めたててきたのである。

——今でこそ、劍聖柳生但馬守宗矩だの、その父柳生但馬守宗厳、別名柳生石舟斎というと、名前だけでもいかめしく感ずるが、これはまだ天文十三年のころのことである。柳生石舟斎とて、まだ新介とよばれていた十七歳の当時の話。

なにしろ、この柳生一帯の者は、なんといっても南朝方についた者の子孫ゆえ、足利氏の世にあつては反体制の民として扱われ、それにもともと稲作をしていないため、山で鹿や狼を捕えてその皮をはぎ、肉は塩漬けにして鷹の餌用に売り歩いてきたからして、「今昔物語」の中にも、歌よみに月が瀬へきたのが若草山の麓から柳生谷へ降りてしまい、道に迷つて暗くなり、人家の灯をみつけ立ち寄つても、「いかなる所へ迷いきたれるか、いぶせき人の住まいは餌取りの棲家ならんかと空恐ろし」といったような具合な土地柄だった

らしい。

今は名称が変わっているが、かつて、「夜支布社」の名で祠堂があったところは、このあたりから大和や洛中へはいりこんでいた者たちを、「夜支」から転化させたのか、「夜叉」とよんで、都の者たちは恐れ蔑んでいたというから、筒井順昭が軍勢を率いて押し寄せたときも、

「おのれッ、やぎう者めッ」と口汚なく罵って、
「刃向かって来る者は容赦せず、みな突き殺して谷底へ落としてしまえ」と下知し、それに、
「かしこまって候」と薙刀や長柄をふりかぶった家来の者たちが、さながらインデアン狩りをする青服の騎兵隊のごとく、

「この庄一つ賜わらんには、なんじようもって命など惜しがることやあらん」

「いざ励み候え」と、みな必死猛死に矢をつぎつぎと飛ばし、相手のひるむところを見計らっては、

「それ、討ってこませ」とかかってゆく。

しかし柳生の面々とても、なにしろ、夜叉ともよばれ、悪鬼羅刹のごとく里人に怖れられていて、一騎当十から当百ぐらいの連中も揃っているゆえ、

「法師武者の口ほどにもなき攻めようや、来るなら来てみる赤とんぼ」

宝蔵院の朱槍隊が真っ先かけて押し寄せてくるのへ、てんでに悪態をつきつつ、かねて用意し積み上げてあった切石の尖ったのを、手に手につかんで、

「これでも、くらい候え」とばかり、霰のごとくに礮打ちする。

だから寄手は飛来する小石の烈しさに、前進できかねたじろぎ、

「弓衆かわりてあれ」と宝蔵院の衆徒は引きあげ、代わって重藤厚重ねの強弓をもった面々が、
「いざ、われらが……」と正面へでてきて、弦音

を嵐のごとく鳴らしてはいっせいに射かけてくる
と、それを望み見て、

「おう弓衆とは望むところ、われらお相手つかまつらん」と柳生の郎党も弓幹を引っ張りだすと、
これに弦をすぐさま張りつけにかかる。

なにしろ、やぎう者は「夜叉」のほかに、かつては「箭弓」の別名もあって、後醍醐帝をお守りして戦った笠置山合戦においても、「太平記」に、「足助の次郎と箭弓の面々、ここを先途と戦いにけり」とでてくるのが、当時の箭弓者のありさまだが、山者ゆえ大弓ではなく半弓を使う。

——今では新蔭流の方が有名になって、柳生といえは刀法だけのようににも思われがちだが、「吉田流射術伝書」という弓術の本によれば、

「楊生の里よりあみ出されし半弓にて長矢をひくの術、今は楊弓といいて広まりたるが、至極その扱い易き利便さにより、両国広小路にて『矢場』などと称す商い店できて、この楊弓にて市井の徒

に若干の錢にて的を射させ、当たれば阿堵物を授け、もって射倅心をそそるなどの語さえ出ずるに到る。これ斯道のためまこと嘆かわしき事にてあれと言う他はなし」

というように出ている。

「矢場女」という私娼がうまれたのは文化文政のころで、形ばかりに客に半弓をひく真似事をさせ、表むきを取り繕っていたものと思っていたが、これによるとそうではないらしく、大弓でなくとも箭弓流の楊弓なら、弓幹が楽にたわむため初めての者でも、的を射るのはさほどまでにむずかしくないため、町人も矢場に入り浸って互いに錢をかけあい、当初は賭突の一種として賭弓をしていたものであるらしい。

つまり、そうした柳生独特の、箭弓流ともいふべき弓術がこの里には伝わっていて、それによると軽い楊弓で大きな太い征矢が射返せるから、筒井方の面々が一列になって、

「いざ、いざや」と、篠つく雨のようにいくら射ちこんできても、それをものともせず、落ちた矢を拾い集めてきては、

「返し矢にて候ぞ」

とばかり、揚弓ゆえ手輕に扱えるから、かなたこなたに身を匿しつつ、ひょうひょうと射って落とす。

そこでどうしても、一列に並んで飛ばせるのに比べ、樹の上や茂みの蔭から、狙って射る方が効果が上がるからして、寄手の中には、己れの矢筒へ入れて背負ってきた矢で、あべこべに自分が止められてしまうといった不運な者もでてきて、「こりや堪らぬ」と筒井方の弓隊はひとまず後退のやむなきにいたった。

しかし、せっかくここまで攻めてきて、おめおめと今さら引き返すわけにはゆかぬ筒井順昭は、鐘が池に近い正木坂に本陣をすえ、

「後手の者（応援隊）をよび候え」と、すぐさま使

いを飛ばせた。

そこで結果的に七月二十七日の力攻めは、双方ともに一進一退で勝敗はなく、このため翌二十八日いっぱいかかって、筒井方は怪我人の手当てをしたり、加勢の来るのを「今か、今か」と待ちながら、そのまま動かずに夜を迎えてしまった。

夜支布神徒

「これ新介……今や天下は麻のごとくに乱れ、西に東に戦火のやむときもない。まさに己れの働き次第でこの国を切り取ってもゆけるは今これからぞ。よって、かかる山界の柳生の庄にあって、あた国軍筒井一族の兵と相戦って潰えてゆくは、まことに口惜しく、残念な話ではある。それに武門の意地というより、われら柳生の神信心の者が、興福寺の仏門に下るは、こりやどないしても出来かねる事……」

陽^ひやけして色黒な顔をかつと上にむけ、父の新左^{くちびろ}は唇^{くちびろ}をかみ、前日よりの戦^{いく}さの疲れを見せつつ、

「かねてより今日あるを予期し、三好長慶さまのお足許^{すか}に縋^{すが}ってはあったが、ただいま三好さまは近江^{おうみ}へ軍勢を催し出向されてご不在。じゃによって、筒井めはその間隙を狙^{ねら}ってのにわか^{わか}の討ちこみ……昨日は郎党、部落の者、みな一丸となつてよく戦^{いく}つてくれたが、手負いで動けぬようになつた者や、哀れ命を失^うつた者が、数えたところ百に近い。すでにわれらは蓄え^{たくわ}の石も矢も使いはたし、人間とて昨朝の半分にもたらぬ減りようという事になる。本日は朝から遠くより取り囲んだまま、向こうがち^ちよっかい出してこぬは後詰^{ごづめ}を待ち、そのうえで改めて攻め寄せてこよう算段とみえる。ゆえに新介、われは何も言わんと今夜ここから落ちて行け」

きっぱりした口調で言つてのけた。しかしそう

言われても、

「はっ」と素直にも言いかねた新介は、「相手が後詰^{ごづめ}を待つて攻め寄せもせず、休んでいゝるはもつけの幸い……生き残^{まど}つた者が一団となつて夜の闇に紛^{まぎ}れ、古城山へ登ると見せかけ柳生川より丹生川^{にう}へでて、それより木津川^{きづ}を渡つて北の笠置へ逃げこんでしまえば、九死に一生が楽に得られるというもの。何も好んで筒井方が加勢をよぶのを待つてやつて、決戦することもありますまいが……」と、真つ向から反対し、

「念のため最前、川中に潜^{もぐ}り、囲みの外へでて、それとなく当たりをつけてきましたなれど、敵の面々は昨日の戦^{いく}さに思わぬ傷手^{いたで}を受けたと見え、みな元気をなくしてしよぼくれいるありさま……決して、やつてやれぬ事ではありませぬ」

しきりに父の新左をかきくどいた。しかし話をしている間は、うなずきつつ黙^{もく}つて聞いていたが、新介が口をとじると、

「うん、その方の言うことは一応は尤もである。

しかし闇に紛れてわれらが消え去ってみよ。大和
一国だけでなく他国にまで、『やはり、やぎう者
よ、夜支布のご神体を担ぎだし命惜しさに消え失
せたか』と、もの喰いの種になるは必定。ここは
ひとまずわれらが命より、わが柳生の名こそ惜し
まん心得と、わが存念を悟れぞかし」

剽悍な顔を振って新介を見据えると、からから
笑ってみせた。そして、

「男は死ぬるも仕事のうち。じゃによって、わしは
この紅葉館にとどまり、明日にもやつらがかかっ
てくればあくまでも討死覚悟で、最後の最後まで
戦い、これまで侮られてきたやぎう者のど根性を
みせてやる……が、それで寸法(格好)はとれるが、
この柳生の庄は筒井のやつらに取られてしまお
う。そこで、われ新介が、どんな策を弄してもか
まわぬゆえ、またぞろ、この柳生の地を筒井から
取り戻し、わが後生を神に願ってくれたら、それ

で夜支布明神も嘉したもうであらうぞ」

と言いきった。そこで新介は仕方なく、言い争
っても無駄かと、(諒承)といわんばかりに、こ
っくりうなずいてみせた。が、腹の中では、
(無茶をこかつせる)と想った。だから、無意識
のうち、それが顔にも出たものらしい。

「……不服か」

重ねて新左は聞いてきた。そこで新介も、最前
の合点を取り消すように、いきなり大声をだし、

「あ、当たり前のこと」とそれに答えた。

いつもだと、すぐ口より早く拳固が飛んでくる
父親なので、またぞろ殴られるかと、すこしひる
んだが、それではならじとひと膝のりだし、

「忤めを落としてやって、おやじどのは居残って
討死さっしゃる……そりゃ人聞きはよろしゅうござ
りましょう。だが、おやじさま初め一族郎党が
揃っていてさえ、守り切れぬ事となったこの柳生
を……わしは守って死んだる、うぬは若いゆえ生

き延び、なんとしてでも取り戻せ、いかなる策を弄したとてかまわんくらいで、おっぼり出され、なんでこの新介が堪りましようや」

かみつくように言つてのけてから、

「ええ格好を自分だけせんと、逃げるならばおやじさまも、わしの言うことを聞いてくださって一緒に笠置路へ……それが無理なら、この新介も外へ放り出さずここにおき、共に討死させてつかわしませ」

と、その場に両手をつき頭を下げた。

いくらやぎう者と蔑まれ、他から白眼視されるのに馴れているとはいえ、新介はまだ十七歳である。これまでは、他でかまわれても逃げこむ所があったからいいようなものの、この本貫地の里を失ってしまったては、どうといった当ても、身を寄せる先とてなく、死なば諸共とばかり、父新左に縋りつくようせがんだのである。

「阿呆ぬかせ。生きるも死ぬも親と共にしたいな

どとは女の子のような……そないに心弱き事は申すでないぞ。男というはいかなる場合であらうと一人で、何もかもせねばならぬものを。もつとよう落ち着いて勘考してから、言うことは腹からぬかすものじゃえ、判るかや」

「はあ、と言わしゃつても……」

「なんじゃえ、まんだ言いたい事があつてか……しよむない奴めが」

いらいらするのにか新左は次第に険しい顔つきになつてきた。

だから新介の方も泣きそうになつて、

「この柳生の里があつてさえ、われらは大和路や京へゆけば、ありややぎう者じゃ物取られるな隠せと、辻の物売りからは泥棒扱いされ、そうかと思えば、やぎう者は臭いと道ゆく者にはからかわれ、餌取りじゃ餌売りじゃと、さながら人外のように扱われているわれらが……この里を失つて、いかに生き延びよと仰せなさるのか。なあ教えな

され。親ならば言うてくだされ」と、まとわりつくごとくにせつつけば、

「……うむ」と、これには新左も眼を閉じ、しばらくは考えこんでいたものの、やおら優しく静かに言い聞かせるごとく、

「じゃによつて、やぎう者の意地にて、われらは逃げ延びんで、ここにて討死こそするのだが……残るその方も考えてみれば不愼^{ふじん}じゃのう。なあ新介、なればいっそのこと、ここを發足したら、そのまま大和をでてしまつて引馬^{ひくま}へ行け。彼の地には薬師寺東海^{やくしじとうかい}総本山頭陀^{ずだつた}寺十二坊の構えがある。あちらはこなたの破石の薬師寺の本山にもなつてゐるゆえ、やぎう者として人外扱いなどせず庇^{かば}うてくださるじやろ……」と教えた。

——今では、薬師寺派も仏教の一派のごとくみられてゐるから、そこへ夜支^{やぎうしや}布社^{ふしゃ}や丹生^{にう}神宮寺社らの信徒である、神信心派の柳生新介が頼つてゆくのはおかしく思われよう。

しかし、薬師寺派というのは、仏教には相違ないが、「西方極樂淨土」をとく淨土宗や真言宗とはまったく異質のものであるところの、「東方瑠璃光如来^{りうりくうにょらい}」を祀^{まつ}つて、東方にこそ光はあると教える東光教で、西方淨土をとく他の仏教とは本質的に違つていた。

だから西曆七四一年である聖武帝^{しやうむひ}天平十三年三月二十四日に、詔して国ごとに国分寺を設立したとき、原住系の民が塊^{かたま}つてゐる地域には、「西方を拝め」というのも至難であろうというので、「東方を拝めばそちらにも淨土はあろう」というこの薬師仏をその本尊とさせた。

だから、それから何百年と星移り年變わつても、別名を「医王仏」とよび、「医王山」とも号する薬師寺は、京にも根城をもうけて各地に広まつた。

柳生谷のような神信心の者も、薬師だけはなんの抵抗もなく信仰していたものらしく、この天文

十三年のころは、今は「夕日観音」のあるあたりまでの一帯に、薬師寺の信徒が多く集まって居住していたようである。

興福寺対大乘院

七月二十九日朝、夜を徹してかけつけてきた三百の新手の軍勢を、その指揮下におさめた筒井順昭は、隊勢を整えるなり息まき、

「こしゃくなり一気に踏み潰してしまえ」

とばかり奮いたって馬に跨り、

「風上より火を放って、人外者の最期を、地獄の業火にて責めさいなんてくれんず」

集めておいた枯草や乾藁の束を持ち出させて、これを紅葉坂の新左の館を取り巻くように並べさせると、折りからの西南の強風に、しめたとばかり順昭が自らの手で火をつけた。

もちろん館の中の者どもは、流れる木津川の支

流柳生川の水を汲んできては消火につとめたが、濛々たる黄煙には誰もが噎せ返ってしまい、

「しっかりせい」と励ます新左も、眼にしみる煙と、咽喉のいがらっぽさにはかてず、昼すぎまではなんとか持ちこたえはしたものの、とうとうしまいには、川に浸って潜っていなくてはどうしようもないありさまとなった。

そこで筒井順昭は、

「矢も石も飛んでこぬところを見ると、いかに夜叉の群れとよばれ、大和のみならず洛中の人々をも恐れさせたやぎう者も、もはや敵わぬところと皆、煙にまかれ熱気に吹かれ、どうやら死に絶えてしまったらしい」

すっかり勢いこんで、左右に従えた大乘院の法師武者の面々に、

「興福寺のご威光をもものともせず手向かいおった奴ばらの死にざま、いさ踏みこんで見てくれんず」と下知した。